はじめに

この資料は，当センターの「特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究」において，特別支援学校の領域・教科を合わせた指導の充実のために作成したものです。

本研究では，領域・教科を合わせた指導の特性と，知的障がいのある児童生徒の特性から，領域・教科を合わせた指導を行うに当たって最も大切であると思われる視点を，「主体性」「学習ニーズ」「達成感」「自立性」「共同性」の五つとし，この五つの視点について次のように考えました。

◆　主体性

日課や学習の環境などを分かりやすくし，見通しをもって学習することで，児童生徒が生活に必要な経験を自ら意欲をもち取り組むことができるよう，「主体性」という視点をもち指導に当たる。

◆　学習ニーズ

知的障がいの状態や経験に応じて，児童生徒の今もっている力や良さ，自立につなげるために何が必要であるかなどを把握することで，児童生徒が日常生活や社会生活に必要な技能や習慣を学習を通して身に付けることができるよう，「学習ニーズ」という視点をもち指導に当たる。

◆　達成感

個に応じた活動量の設定や環境の工夫をすることで，児童生徒が目的をもち，十分な活動をしながら大きな満足感，成就感を得ることができるよう，「達成感」という視点をもち指導に当たる。

◆　自立性

できるだけ自分の力で活動できる環境に整えることで，児童生徒が成功経験を積み重ね，自信をもつことにつながるよう，「自立性」という視点をもち指導に当たる。

◆　共同性

望ましい社会生活にむけた集団での学習を通して，一人一人に合った役割が得られるよう工夫することで，児童生徒が集団の一員としての意識をもてるよう，「共同性」という視点をもち指導に当たる。

この資料は，五つの視点を授業づくりにおいてイメージしやすいように児童生徒の目指す姿に言葉を換えて示しました。そして，各ページでは，自分の授業について振り返っていただけるように読んでくださる皆さんに問題提起をし，その後，児童生徒の目指す姿に向けた有効な取組について示しました。

また，この資料を授業の計画の手順について示した「授業実践編」と合わせて使用していただき，領域・教科を合わせた指導が，児童生徒のために五つの視点を取り入れながら，充実して行われることを願っています。

Ⅰ　進んで活動に取り組む姿

主　体　性

日課や学習の環境などを分かりやすくし，見通しをもって学習することで，児童生徒が生活に必要な経験を自ら意欲をもち取り組むことができるよう，「主体性」という視点をもち指導に当たる。

児童生徒に合わせて年間指導計画を運用していますか？

年間指導計画を立てる立案の際には，児童生徒が進んで活動に取り組むことができるように，主体性を大切にして，興味・関心に基づいた計画にすることが大切です。また，年間指導計画を運用する際には，児童生徒の興味・関心や学習の進展に応じて，継続したり，発展させたり，変更したりする，柔軟な対応も必要です。

児童生徒に合わせた年間指導計画の立案

年間指導計画の弾力的な運用

興味・関心のある活動を中心に継続し発展させる

例

学級の全員が好きな「そば」を中心に取り組んでいきます。

種まきや収穫などの畑の作業，そばを食べに行く，調理，店を開くというように一年間の計画を，興味・関心のある活動を中心にして継続・発展させていくことで，年間を通して意欲をもった取組とすることが大切です。

興味・関心に応じて，発展させていく

例

校外学習で船に乗ってきました。「自分たちも船を造って乗りたい！」という児童生徒の気もちを取り上げ，それに応えるよう，「船を造って乗る」ための学習を展開していきます。

このように，児童生徒の興味・関心から生まれた発想を次の学習へと発展させていくことが大切です。

興味・関心に応じて計画を変更する

例

年度当初計画した時には予測できないことに，興味・関心を示すことがあります。例えば「入院している先生のお見舞い」や「壊れたフェンスを直そう」など，生活の中のできごとから取り組んでいくことがあるでしょう。

年間指導計画の変更を行い，児童生徒のその時の興味・関心に応えていくことも大切です。

変化・発展・充実していく学校生活

ひとこと

今までどんな内容の学習を積み重ねてきているのか知ることは，児童生徒の興味・関心の様子を知る一つの手がかりとなります。そこで，年度の終わりに年間指導計画により一年間を振り返り，取組の様子や反省を引継いでいくことが，とても参考になります。

年間指導計画を弾力的に運用するためのチェック

- □ 活動に取り組む児童生徒の興味・関心について，引継や情報交換により教師間で共通理解できていますか？
- □ 児童生徒の発想に共感し，取り上げていますか？
- □ 日常生活の中での児童生徒の言動を注意深く観察し，大切にしていますか？

見通しをもって学習できる日課ですか？

今日の勉強は何をするのか分かっていたら，「今日は学校でこんな活動がしたい！」と子ども達が目的をもって登校することができます。そこで，今日はどんな学習をするのか児童生徒に分かりやすくするために，時間割の工夫をすることで生活のリズムを整え，見通しがもてる学校生活にすることが大切です。

生活のリズムを整える工夫

児童生徒が，楽しいと感じられる充実した授業にすることが大切です。そうすることで，次の授業はいつか，楽しみに待つことができます。そこで，いつどんな学習をするのか見通しがもてるようにしていくことが大切です。

A 支援学校の例

月	火	水	木	金
着替え・朝の会	着替え・朝の会	着替え・朝の会	着替え・朝の会	着替え・朝の会
生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習
生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習	生活単元学習
給食	給食	給食	給食	給食
体育	委員会	集会	総合	体育

毎日同じ活動を繰り返すことができるので，定着します。

毎日の日課が決まっていて，見通しがもてます。

生活の流れが単純で，分かりやすくなります。

B 支援学校の例

月	火	水	木	金
朝の会・課題	朝の会・課題	朝の会・課題	朝の会・課題	朝の会・課題
体育	音楽	体育	音楽	生活単元学習
生活単元学習	集会	生活単元学習	図工	図工
給食	給食	給食	給食	給食
遊び	生活単元学習	クラブ	遊び	

毎日の繰り返しが難しい。

いつ，どんな学習があるのか分かりにくい。

生活の流れに規則性がない。

工夫

領域・教科を合わせた指導においては，**学習活動の流れを同じに**する。

一日のスケジュール提示を分かりやすい方法で行います。

カレンダーなどを使用し，領域・教科を合わせた指導について，いつどんな学習があるか提示します。

見通しのもてる学校生活

学校は，目的をもって生活できる場になっていますか？

児童生徒が，進んで取り組むことができるためには，学校生活にめあてや見通しをもつことが必要です。そのためには，一生懸命取り組める活動を一定期間，継続して行うことが大切です。また，この単元期間中の日課を同じにすることで，児童生徒は，活動に慣れることができます。このことにより，学校生活に見通しをもったり，自信がついたりし，自分で活動を進めていけるようになります。

生活にテーマをもたせる工夫

その１

まとまった期間（２～４週間程度），同一の単元に取り組む

単元の実施期間は，活動の流れが分かり，見通しをもち，取り組めるようになる期間に加え，「定着する」，「上達する」ための期間も考え計画することが大切です。

その２

毎日，類似した活動を繰り返す

～例～

例１（宿泊学習の事前指導）

宿泊学習での活動をキャンプファイヤーの活動をメインに考えました。そこで，事前学習では，当日のキャンプファイヤーの係の活動や次第に沿った歌やダンスなどの活動を行いました。

宿泊学習の事前学習の間の活動の流れ
１　朝の課題学習
　　しおり作りで日程，約束の確認（クラス，個別）
２　キャンプファイヤーをしよう
　　係毎の準備活動（グループ）
　　歌→ダンス→お話→ゲーム（全員）
　　片付け（全員）

また，朝の課題学習の時間を利用して，宿泊学習のしおり作りを行うことで，当日の日程の確認や注意事項などを学習しました。

例２（紙遊び）

体育館に新聞紙を使用して４つのコーナーを作りました。

A　新聞紙をまるめておく
B　新聞紙を小さくちぎっておく
C　新聞紙を細長く破いてつるしておく
D　自分で作成できるようそのまま新聞紙をおく。作成のヒントになるよう，筒状に丸めたり，様々な形に折ったりしておく。

児童は，それぞれが好きなコーナーで遊びます。

遊びに慣れてきたころ，紙で作った大きなクマを体育館の真ん中に設置しました。すると，このクマに向かって，新聞紙ボールをぶつける子，丸めた新聞紙の筒ででたたく子，そのクマを補修する子，真似して作る子等遊びがさらに発展していきました。

その後，家で新聞紙の筒に折り紙などを飾り，剣を作ってきたり，それをまねて休み時間に友達同士で協力して飾りつけをしたりする様子も見られました。

その３

教科別の指導を関連づける

教科別の指導がある場合は，その単元の活動に関連した学習を行うことで，その単元の活動が定着しやすくなったり，より上達したりすることができます。また，教科の学習も単元の中で実際に活用できるため，自分から進んで取り組むことができます。

目的のもてる学校生活

ひとこと１

一定期間単元を継続することで心配されるのは，単調な繰り返しの活動に飽きてしまうことが多い場合です。児童生徒の取組の様子を見ながら，興味・関心や向上心をもち取り組んでいけるように，支援の見直しや教材・教具，評価の工夫などを常に行うことが大切です。

ひとこと２

活動が具体的にイメージできる単元名にします。

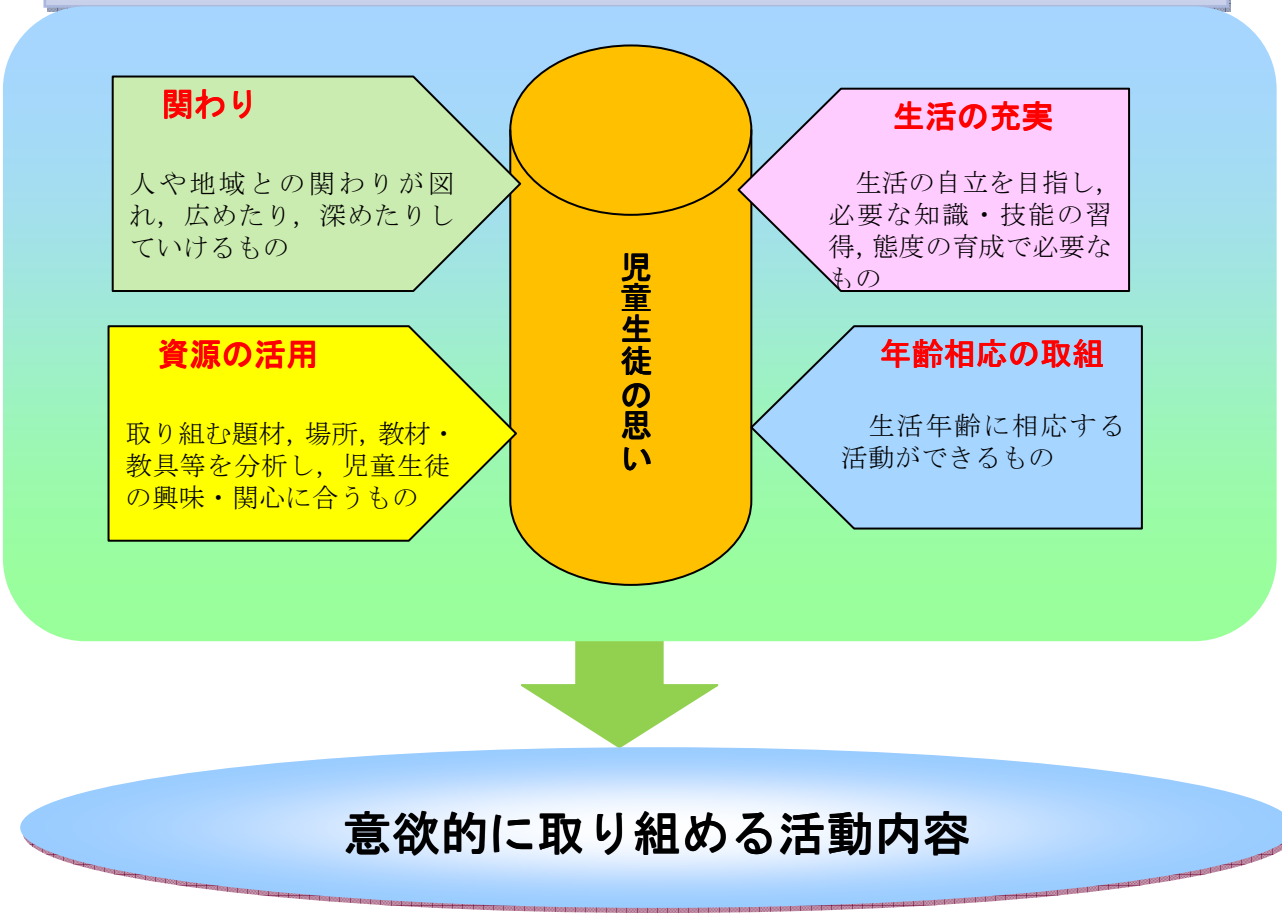
例えば，「春をさがそう」より「桜を見に行こう」のほうが目的がはっきり分かります。

児童生徒の生活が充実するような活動内容を設定していますか？

活動内容を設定する際には，楽しむだけでなく，しかも，生活の充実を目指し，意欲的に活動に取り組むことができるように児童生徒主体の活動内容を設定していく必要があります。

児童生徒の思いや興味関心を中心に据え，生活を充実させるために必要な知識・技能等を広げること，地域との関わりを広げること，教材等物との関わりを広げること，年齢相応な行動を広げることを加味しながら，活動内容を設定することが大切です。

児童生徒の思いと教師の願いを基にした活動内容



ひとこと

個々の興味・関心に基づいて活動を考えていくと活動内容は，限られたものになってしまいます。しかし，集団での活動は，仲間と楽しんだり，力を合わせたりしていくことで新しいことにも目を向け，興味・関心を広げていくことができます。このような集団での取組により，興味・関心を呼び起こす活動内容を盛り込んでいくことも大切です。

意欲的に取り組める活動内容のチェック

- □ 児童生徒の言動に寄り添い，気持ちをくみ取ろうとしていますか？
- □ 保護者と，家庭や学校の様子を情報交換していますか？
- □ 児童生徒の生活を充実することについて，教師間で十分に話し合い，確認していますか ？

児童生徒が意欲を引き出す手立てを工夫していますか？

知的障がいのある児童生徒が，進んで活動に取り組むためには活動の見通しや，目的意識をもてるようにしたり，新しいことにも安心して挑戦できるようにしたり，自信や喜びがもてるようにしたりするなどの手立ての工夫をしていくことが大切です。

意欲を引き出す手立ての工夫

やってみたい

知っている

やりたい！

うまくなりたい

「できる」環境を整える

自信をもち取り組めるよう，これまでの経験を生かした支援や計画を立てる。

・児童生徒が一人で使える教材・教具の準備をする
・繰り返しの活動ができる日程の計画を立てる

活動に見通しをもつことができるようにする

具体的にイメージできるような方法で提示する。

・導入に実体験できる設定をする（見る，聞く，触れる，やってみる等）
・ＶＴＲや写真をなどの提示をする

目的意識をもつことができるようにする

活動の目標を分かりやすく示す。

・活動のテーマの設定をする
・身近で分かりやすい活動の設定をする
・目標を具体的に設定する

ワクワクする

挑戦する機会を設ける

安心できる環境づくりを行う。

・教師との信頼関係を築く
・励まし合い，共感し合いながら仲間づくりをする

分かる評価をする

自信や喜びにつながるような評価をする。

・ほめる
・感謝を伝える
・取組の成果が分かるよう提示する

うれしい

やったー，できた

できそう

もっとがんばるぞ！

意欲的な活動

Ⅱ　能力に即した活動に取り組む姿

学習ニーズ

知的障がいの状態や経験に応じて，児童生徒の今もっている力や良さ，自立につなげるために何が必要であるかなどを把握することで，児童生徒が日常生活や社会生活に必要な技能や習慣を学習を通して身に付けることができるよう，「学習ニーズ」という視点をもち指導に当たる。

一人一人の生活を見据えた実態把握をしていますか？

知的障がいのある児童生徒が，自立した生活に必要な知識・技能を身に付けていくためには，教師が「何ができるか」「良さは何か」など具体的に実態把握をする必要があります。そのためには，児童生徒に関わる人たちと情報交換しながら，多面的に一人一人の実態を捉える必要があります。また，将来どのような生活を望んでいるか知ることも，大切な実態把握の一つとなります。

一人一人の実態の把握

発達の状態を知る

児童生徒一人一人の発達の様子を知ることで，個に応じた指導の設定をすることができます。この発達の様子は，発達検査や知能検査で一般的な発達の基準，特性などを知ることができます。また，共に学校生活することを通して，生活の様子を観察することが大切な実態把握の情報となります。さらに，生徒の療育等に関わる人たちとの情報交換や教師間で普段の生活の様子について情報を共有することも大切なことです

心理検査から

得意なこと不得意なことを客観的にできる力を高めるための方向性を確かめる

生活の様子から

興味・関心が何かを知る
得意なこと，長所をつかみ，何をしたらやる気になるかを推察する

自立した生活のための情報

本人や保護者の希望を聞く

児童生徒の将来の生活は，本人の発達だけにより決まるものでなく，将来想定される生活環境によってもそれぞれ違っていきます。

例えば，生活場所が，家，グループホーム，施設等のうちどこにするかが違うだけで，生活は大きく変わります。職場への通勤をどうするか，食事や洗濯など身の回りのことは誰がどのように行うか等について考え，目指す生活を可能にするにはどんな支援が必要かなどを踏まえ，本人や保護者が，将来どんな生活を望んでいるのか知ることが必要です。

自立した生活を見据えた実態把握

ひとこと

児童生徒にとって難しすぎたり簡単すぎたりすることでは，真の学習にはつながりません。全員が同じ活動をすることにとどまらず、ニーズに応じた，それぞれに必要な経験をすることが，平等にするということの基本です。

実態把握のチェック

- □ 卒業後の生活について，本人や保護者と話し合っていますか？
- □ 家庭や学校の様子を情報交換し，児童生徒一人一人が興味・関心をもち取り組めそうなことを把握していますか？
- □ 児童生徒のできる力を高めるための教師集団の話し合い，共通理解ができていますか？

一人一人の卒業後の生活を目指していますか？

卒業後の生活は，児童生徒の発達の様子や生活の環境から一人一人違っています。どのような生活を目指したら良いかを考え，将来を見据えた今の一人一人の学習ニーズを捉えていくことが大切です。また，今，身に付けておかなければならない課題を見逃さず目標を設定することが必要です。

また，それぞれの時期にどのような学習に取り組んでいくべきか，生活年齢も加味しながら学習ニーズを考えていくことが大切です。

卒業後の生活を見据えること

できる力を高める
～発達の状態に合った支援を～

一人一人の発達の状態にあった支援をすることで，一人一人の力を伸ばしていきます。

この一人一人の力を伸ばすとは，難しいことやできないことができるようになることだけではなく，今できることを様々な場面で活用することができるよう広げていくという考え方が大切になります。

支援の充実
～卒業後の生活の充実のために～

卒業後の生活を豊かにするためには，一人一人に応じた支援で，社会生活を充実させていくことも必要なことです。発達の様子から想定したり家庭と話し合いをしたりしながら，どのような生活を目指すべきかを踏まえて，一人一人に必要な学習を考えていくことが大切です。

卒業後の生活を目指した目標

ひとこと

電車で校外学習に行った時のことです。Ａ君は，電車の窓から見える景色を眺めることが大好きでした。ズックを脱ぎ，窓の方を向いていつも景色を眺めています。Ａ君が，将来大人になってからもこの電車に乗ることを楽しみの一つとして，あるいは，交通手段としていけるようにしていくことが望まれます。

そこで，様々な学習の機会を捉えて，年齢にふさわしい電車に乗るマナーや乗り方をスキルとしてトレーニングしていくことが大切です。

年齢を加味した目標を立てるためのチェック

- □ 大人になるための目標設定をしていますか？
- □ 年齢にあった活動ができるように教育課程や支援の在り方を考えていますか？
- □ 地域での活動に積極的に取り組んでいますか？

生活の中で活用する力がつく取組になっていますか？

実際の場面で，一人一人に必要な経験を行う中で知識・技能を身に付けていくことが大切です。

その中で，目的意識がもてたり，活動の流れが分かったり，問題解決できたりするような自然な学校生活野中でまとまりのある取組をしていくことが大切です。

自然なまとまりのある活動を組織することで生活に活用できる

目的意識がもてる活動

活動の一部だけを取り出し，教科やスキル的な内容を集めた活動をするのではなく，まとまりのある活動をすることが必要です。

そのためには，一人一人の生活に必要で興味･関心がもてる活動を基に，目的を分かりやすくすることが必要です。

流れが分かる活動

自分の活動について理解して活動することが必要です。

そのためには，状況や支援者が変わっても活用できるように，一人一人の実態に合った手がかりを基に，一連の流れに沿って活動できるようにすることが大切です。

問題解決できる活動

今までの経験などを基に自分でやり方を考えたり，やりやすい方法を考えたりして活動できることが必要です。

そのためには，一人一人の実態に応じて，少しがんばることで達成できる活動を設定し，問題解決できるようにすることが大切です。

日常生活や社会生活の充実のための
知識・技能

ひとこと

繰り返し行うことで，活動が定着しやすくなります。このとき，機械的なパターン化にならないように気をつけたいものです。

例えば，朝の会で健康観察をしています。よく見られるのが，「元気ですか？」，「元気で～す！」という言葉のやりとりのパターンで終わってしまっている光景です。自分の体調の表現方法や，伝える手段を身に付けることができるようになったりすることを目的としているはずです本来の意味が分かって活動できるような工夫も必要です。

一人一人の活動が充実していますか？

児童生徒は，発達の状態や経験に応じた力を発揮し，活動に取り組むことで，やりがいや手応えを感じることができます。そこで，教師は，一人一人のもっている力を生かし，活動内容を考えていくことが大切です。

力を生かす

一人一人のできる力を様々な場面に生かしていくことが考えられます。

例

Ｆさんのできる活動
「テニスボールを握ることができる」

- ゲーム：玉入れゲームでボールを拾いかごに入れる。
- 作　業：ボールをスタンプとして使用。
- 畑：ジャガイモやにんじんをかごに入れる。
- 選　挙：投票数だけボールを入れる。

みんなで一つの活動をする場合は，一人一人のできる力を生かしながら，分担して取り組むことが考えられます。　**例**

運動会の案内状作成

- Ａさん：自分で文章を考え，書く
- Ｂさん：手本をまねして書く。
- Ｃさん：案内が書かれてあるものをはさみで切り取り，貼る。
- Ｄさん：案内状に飾りを付ける。

一人一人の充実した活動

ひとこと

全員が自分の名前を書く活動に取り組む場合・・・

△文字を書くことが得意な子は，さっさと書いてしまい，時間をもてあましている。
→ ○文字を書ける子なら手本を見て丁寧に書く。５枚練習していいものを提出します。目標を高く設定します。

△鉛筆を持てない子が，先生に鉛筆を持たされて書かされている。
→ ○文字にこだわらず，スタンプやステンシルで名前を作成することを考えます。

実践の様子

農業高校に行った思い出に牧場を作りました！

ステンシル

トレーを使い，紙がずれないようになっているから一人でできます。

タンポの枝の太さや先の大きさも一人一人が使いやすいように工夫しました。

切る係

協　力

自分のできる作業をして，みんなで作り上げました。

貼る係

テープ係

Ⅲ　存分に取り組む姿

達　成　感

個に応じた活動量の設定や環境の工夫をすることで，児童生徒が目的をもち，十分な活動をしながら大きな満足感，成就感を得ることができるよう，「達成感」という視点をもち指導に当たる。

取組の目的に合った活動内容・活動量が設定されていますか？

できること，活動のスピード，集中力など活動の様子は，一人一人違います。そのため，実態に応じて存分な活動につながるよう，具体的に捉えておく必要があります。そして，満足感や，達成感につながるよう，一人一人が目的をもてる計画にすることが大切です。

取組の目的にあった活動内容

どんなことができる？

どんなことができるか知っていることで，できる活動を取り入れていくことができます。

興味・関心があることは？

どんなことを取り入れたら意欲がわくか，楽しめるか，一生懸命になれるか考えることができます。

取組の目的に合った活動量

集中の時間は？

一生懸命取り組める，集中して取り組める，楽しんで取り組めるなどの時間がどのくらいか把握し配慮する必要があります。

どのぐらいのレベル？

どのくらいできるか，レベルを知っていることで完成度をどのくらいに求めるか知ることができます。

活動の目標の提示は？

一人一人が，分かる目標作業量の設定と提示を行います。
・タイマーを使用して何分間活動するか示す。
・個数を決める。
・どんな仕上がりかモデルを示す。
など，一人一人の実態に応じて，分かるように設定していくことが大切です。

目的をもてる計画

ひとこと

成功を繰り返すことだけが，満足感・成就感を感じる活動だとは限りません。失敗したときでも，うまくいく方法を考え，やり直すことでやり方が分かったり，繰り返し行っていくことでうまくなったりし，満足感・成就感を感じることができます。そのためには，失敗してもまた挑戦するという気持ちを育てていくことが大切です。また，失敗したときにうまくいく手段を示すことも大切です。

児童生徒一人一人に合った活動を設定するためのチェック

- □どんな活動が好きか？
- □どんなことができるか？
- □どこまで一人で，できるか？
- □どのくらいの時間，継続してできるか？
- □どのような支援があればわかるか？
- □どのようにすれば集中していられるか？

待たずに活動できる工夫をしていますか？

児童生徒は，活動を見ているだけ，聞いているだけでは満足できません。また，具体的な活動においても，参加できずにいたり，待っている時間が長くなったりしても満足できません。そこで，一人一人が十分な活動をするためには，活動の流れや内容について十分に検討し，見直していくことが必要です。そのために，活動の様子を振り返り，原因を探り，適切に手立てを構成していくことが大切です。

活動の見直し

個別に取り組んでいる場合の活動の見直し例

◎放っておいている

一人で活動することはよいのですが，その場合は，自分で取組の様子について確認できる支援が必要です。また，がんばって活動していることに対しての賞賛や励ましをしていくことも大切です。

◎教師がやってあげすぎている

教師がどこで失敗するか，何が苦手かわかり，先回りしていることがあります。誰かがそばにいないと成功できないのではなく，自分で失敗しない方法や気を付けなければいけないポイントに気付くような支援をしていくことが大切です。

集団で取り組んでいる場合の活動の見直し例

◎その場にいるだけで参加しているとする場合

特定の児童生徒のみが力を発揮している場合があります。例えば，マットの片付けでは，一生懸命運ぶ児童生徒もいれば，触っているだけ，後ろを着いて来るだけ，参加しない・・・などの児童生徒がいる場合があります。グループに分けて参加できるようにしたり，別な物を運ぶよう役割分担したりするなど参加できる工夫が必要です。

◎ただ待たせている場合

順番を待っている児童生徒は，ただ待っているだけの時間になってしまう場合があります。友だちの活動の準備をしたり，友達の活動の様子を見たり順番を待っている時間を有効に使えるようにすることが大切です。

個に応じた十分な活動

ひとこと

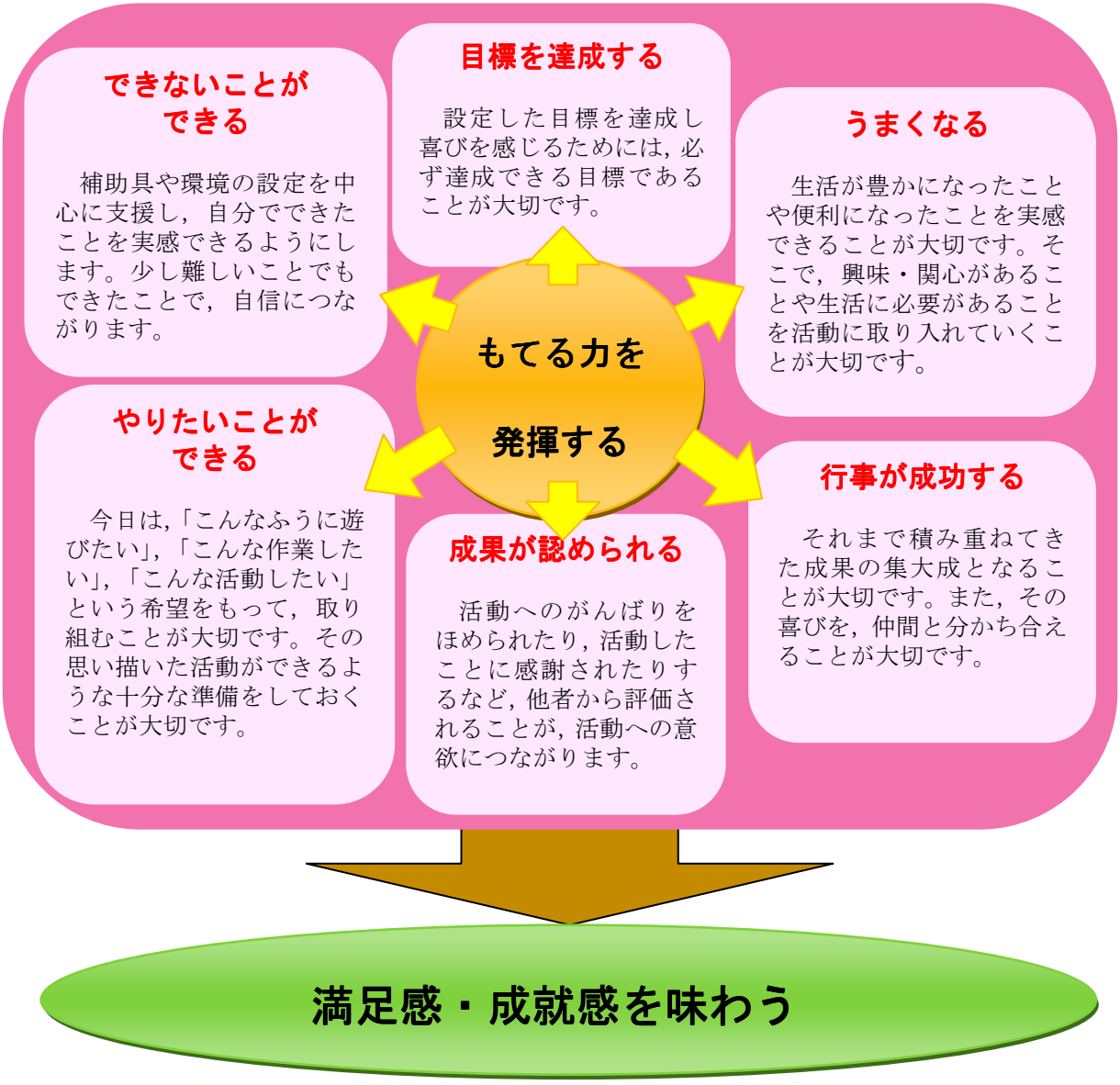
例えば，リレーをしているとき。自分の順番を待っている時間があります。この待つ時間も大切な学びの時間です。友だちの走る様子を応援したり，待っている間に自分の順番を確認したりするなど，一人一人に合った活動を準備することで，待つ時間が大切な学びの時間になります。そこで，教師が，児童生徒の活動を一人一想定したり，活動の様子を観察・評価したりし，待つ時間の手立てを講ずることが大切です。

十分な活動が準備できているかチェック

- □ 順番を待って，見ている時間が長くないですか？
- □ 教師にやってもらうことが多くなっていませんか？
- □ 簡単すぎたり，難しすぎたりしていませんか？

満足感を味わえる活動ですか？

満足感・成就感を味わうためには，目的がはっきりしていることが必要です。この目的に向かって一生懸命取り組んだときに満足感・成就感を味わうことができます。そこで，児童生徒が，目的をもった上で何をやりたいのか，どんなふうにやりたいのかなど，自分で目的に向かって，見通しをもって取り組むことができるようにすることが大切です。



ひとこと

活動の最後は，「がんばったね」「上手でした」とほめて終わる授業が多く見られます。これらの言葉を児童生徒に具体的に自分の活動の成果が分かるように伝えることが，望ましい評価になります。そこで，どこを見て「上手」とほめられたのか，どのぐらいやったら「がんばったね」とほめられたのか分かるように示すことが大切です。このように，児童生徒の活動を具体的に分かる評価をしてこそ，ほめられたときに「がんばって良かった」という満足感を味わうことができ，次の目標にもつながっていきます。

Ⅳ　自分のもてる力を高めようと取り組む姿

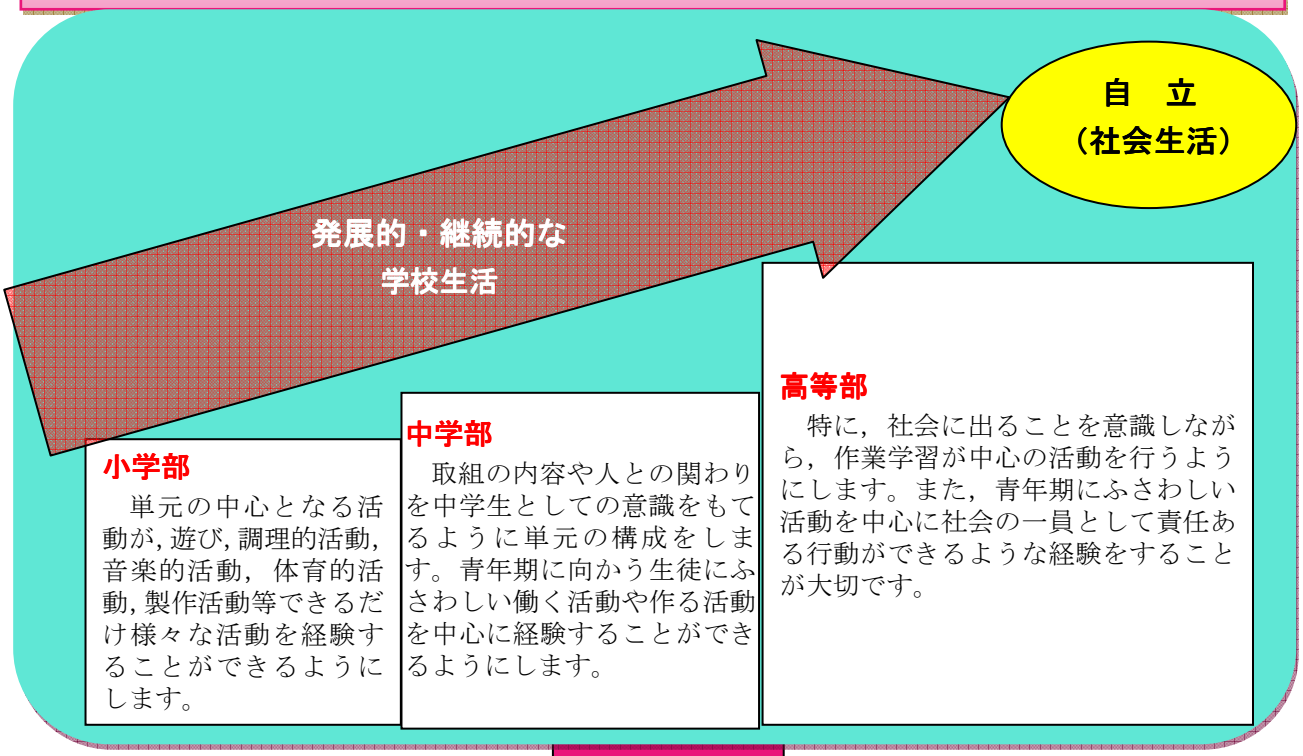
自　立　性

　できるだけ自分の力で活動できる環境に整えることで，児童生徒が成功経験を積み重ね，自信をもつことにつながるよう，「自立性」という視点をもち指導に当たる。

社会生活につながる目標ですか？

先輩の活動する姿は，自分の目指す生活を想像する手がかりとなります。１年生は２年生の姿を目指し，小学部は中学部や高等部の姿を目指し，学校は卒業後の自立した社会生活を目指しています。自分がどんな大人になりたいのか，目標をはっきりもてるように，良い見本を具体的に示すことが大切です。

一歩前へ進むために



社会生活につながる目標

ひとこと

校外学習で電車やバスに乗る学習をします。先生がしっかり手をつないで行ってきました。このような対応は，安全の面から見ると必要ですが，いつまでも。先生と手をつないで校外学習に出掛けるわけにはいきません。年齢相応の関わり方をしながら，大人としての社会生活に向けた目標もスモールステップで学ぶことができるようにし，年齢に合わせた行動ができるようにしていくことが大切です。

チェック

- □ 個別の教育支援計画を活用し，一人一人の目標が，一貫したものになっていますか？
- □ 学年に合った内容を意識して年間指導計画を立てていますか？
- □ 同じ題材を使った単元でも年齢に合わせて活動内容や活動量を計画していますか？

児童生徒が，自分の力を発揮できる活動ですか？

知的障がいのある児童生徒は，誰かにやってもらう場面が多くなってしまいます。「やったことがある」というだけでは，実際の生活の中で生かすことのできる力にはなりません。「できる」という力に高めることで，生活の場面で生かしたり，自信や意欲をもったりし，生活することにつながります。そのためには、児童生徒が，もっとやってみたい，うまくなりたいと思えるような授業にしていくことが大切です。

もっと活動的に参加するために

教師の話を短くする

手順や注意事項などの説明は，視覚的に提示することで補いながら，必要最小限にします。このようにして，説明を聞く時間よりも実際に活動する時間を多く取るようにします。

- 日程計画を提示　・場所
- 道具　・手順表でやり方
- スケジュール　・約束
- グループのメンバーなど

このようなことを写真，ＶＴＲ，実物で提示することで，活動のイメージをもちやすく，分かって活動することにつながります。

教師のやっていたことを児童生徒の活動に変える

準備や片付けは，児童生徒と共に行います。このように最初から最後まで自分たちで活動することで，生活に必要な知識や技能が身に付くと共に，活動の見通しをもつことにもつながります。

また，自分でできる活動にしたり，自分でできるように補助具等の支援を整えたりすることで，順番待ちや試行的な活動を減らします。

教師の支援について見直す

児童生徒が「何をしたらいいか」，「どこに行けばいいか」，「どんなふうにしたらできるか」など自分で考えながら活動することができる支援をすることが大切です。

補助具等の準備をすることで，教師がそばにいないと活動できないという状況を改善していくことが大切です。

自分で使うものを準備したり，自分の活動する場所に移動したりする場合，教師が一緒に移動するのではなく，教師と教師の連携で児童生徒がどこに行けばいいのか分かるように，教師は，連携がとれる位置の確認をすることが大切です。

自ら活動する　いきいき活動する　力を発揮して活動する

児童生徒主体の授業

ひとこと

「ここは，気を付けてくださいね」と失敗しそうなところや難しいところを教えてくれる先生がいます。手順表などで示してくれる先生もいるでしょう。

そして，うまくいかなかったときに「ちゃんと注意してねと教えていたのに・・・」とマイナスの評価をする場合があります。本人は，もっと落ち込んでいます。

マイナスの評価はせず，できるまで，じっくり見守り，励ましてあげることが必要です。そして，できたときには共に喜んだり，ほめたりし，それまでのがんばりを認めていくことも大切です。

このような経験をしながら，失敗しても，挑戦する姿勢を身に付けていくことが大切です。

年齢に合った活動ですか？

学校生活は，社会にでるまでの大切な時期の生活の中心です。一歩ずつ着実に積み重ねていくことが大切です。その年齢，学年の時期には，その時期あった育てたい力があります。その時期を逃さず，ライフステージに必要な力を身に付けていくことが必要です。そのためには，確実に今，身に付ける必要のある力を逃さずに付けていくことが大切です。

今の生活の充実

学校生活の充実
～活動内容の吟味を～

それぞれの児童生徒は発達の段階によってできることがそれぞれ違います。しかし，社会では，年齢相応の行動が求められます。６年生は，小学部の最高学年としての役割があります。その自覚をもつて活動できることで，学校生活が充実します。そこで，学年にあった（年齢相応の）活動内容を吟味することが，大切です。

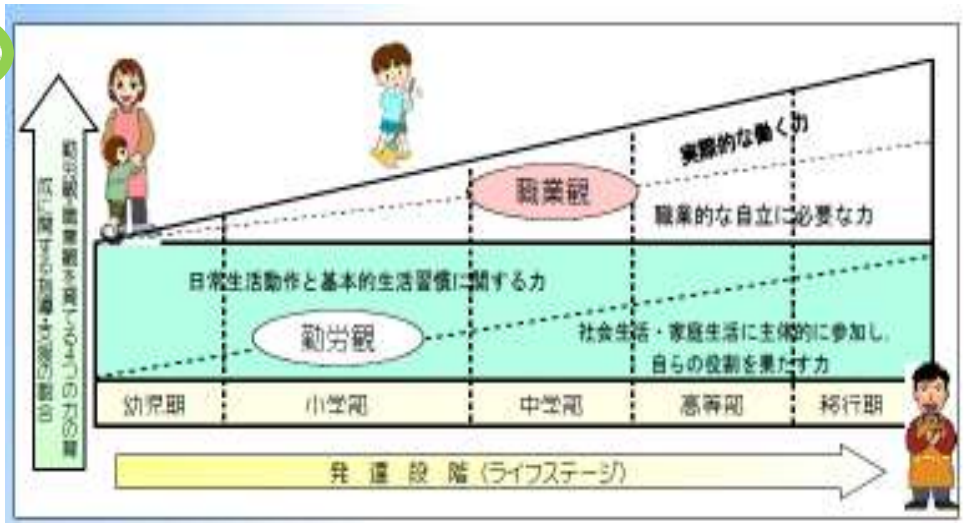
日常生活の充実
～責任ある活動を加味して～

排泄が自立することで，定時排泄や着替えなどの，そのために要していた時間を省き，遊びや作業など他の時間に集中して取り組むことができるようになります。このように，日常生活が充実していくことは，生活をより質の高いものにすることを可能にします。そこで，将来の生活につながっていくために，この発達段階にあった生活の充実を考える，年齢相応の責任ある活動ができるようにしていくことが大切です。

ライフステージにあった活動

ひとこと

右の図は，勤労観・職業観を育てるための指導･支援の割合（岩手県立総合教育センター特別支援教育室 2006）を示したものです。キャリア教育に必要な職業観，勤労観を育てるための指導･支援の割合が示されています。その時期には，その時期あった育てたい力が，あることが分かります。年齢相応の力を育てられる目標や内容を設定する手がかりとなります。



【図】岩手県立総合教育センター特別支援教育室 2006
勤労観・職業観を育てるための指導・支援の割合

自信を付けることができる活動ですか？

「自分でやる」という気持ちは，自立した生活を支えます。このような気持ちを育てるためには，自分でできたという成功経験を積み重ねることで「できる」という自信をもつことが求められます。そこで，自分でできるための支援を適切に行っていくことが大切です。

自信がもてない原因

・やったことがない
・やってもらうことに慣れてしまっている
・自分がやることだと思っていない。
・失敗をすることが多い
・やり方が分からない
・ほめられたり、あてにされたりする経験が少ない

自分でできるために

難しいところを補う補助具

補助具の使用は，児童生徒の技能を補うことができ，自分でできるようにすることを可能にします。このような自分でできたという経験は，自信につながり，やがて自分の力を高めようとする意欲につながります。

経験の機会を増やす計画

「やったことがある」というだけでは，実際の生活の中で生かすことのできる力にはなりません。自分で努力してできたことが生活の場面で生かされることで，自信をもつことにつながります。そのためには，活動に継続して取り組める計画にすることが大切です。

自分でやろうとする意識

やってもらうことが多いと，それになれてしまいます。自分でやることが良いことなのだという意識をもてるよう，促していくことが求められます。励ましたり，ほめたりしながら成功経験を多くし，自発的，自立的な活動を促していくことで自立した生活につなげていくことが大切です。

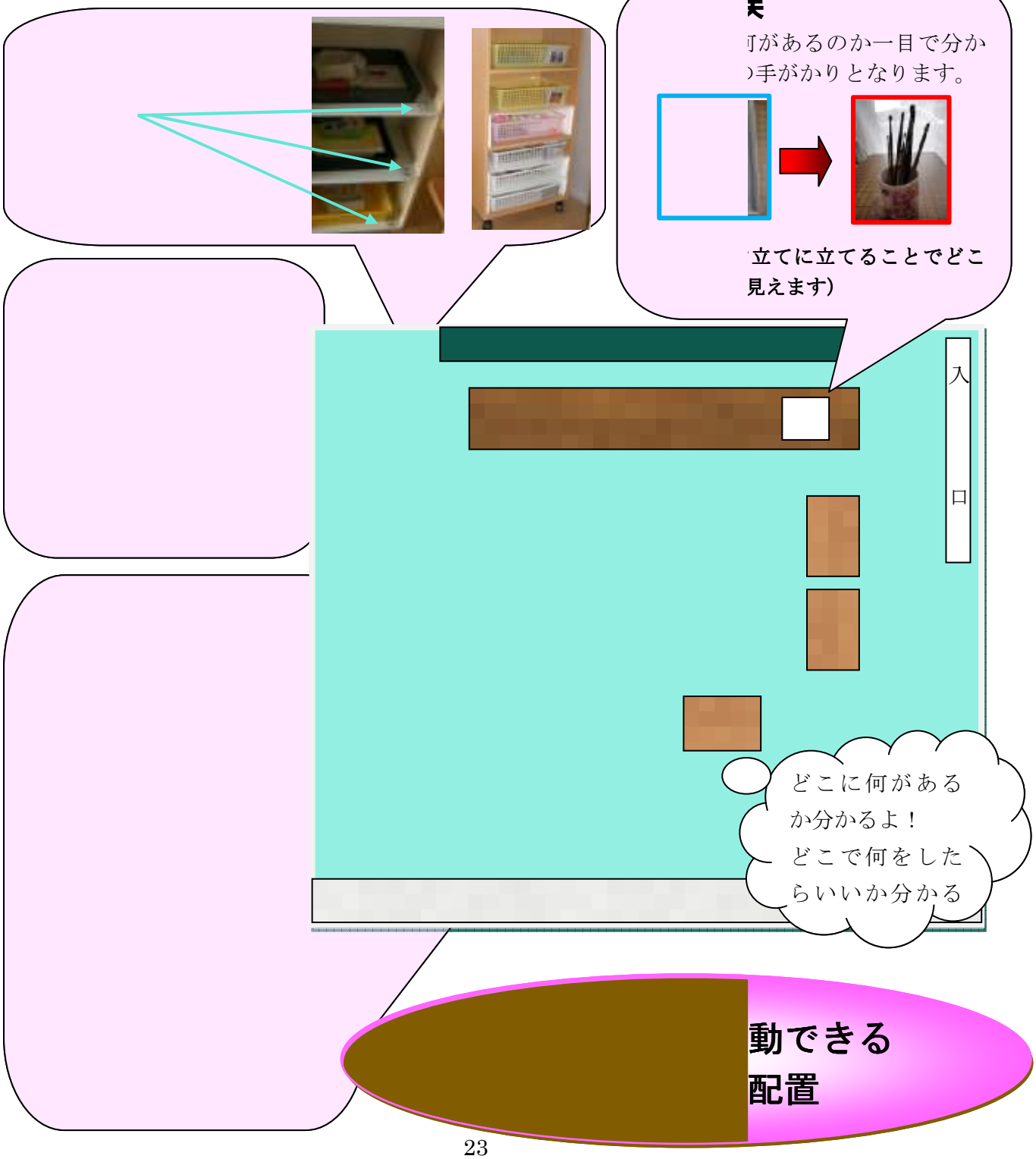
自信を付ける成功経験

ひとこと

児童生徒が，失敗したときに「どうしてやり方をよく見ていなかったの？」と指摘する先生がいます。本人は，一生懸命でも，見るのとやるのでは全く違います。どこを注意して見たらいいか分からなかったのかもしれません。また，１回や２回やっただけではうまくできるようにはならないことも多くあります。そこで，できるような手立てを提供し，じっくり取り組める計画を立て，できる手応えを感じられるようにすることが大切です。

っていますか？

かるようにすることが
で，「自分のことは自分
うに整理したり，しま
です。また，活動の場



教材・教具，補助具は，自分で使えますか？

自分では解決困難な課題を首尾よく成し遂げることができるようにするための手段として，教材・教具，補助具を使用する場合があります。この場合，豊かな経験や，質の高い生活を導くことにつながることを念頭に置く必要があります。そこで，教材・教具，補助具を使用する場合，児童生徒が自分で使え，必要最小限にしていくことが必要です。そのためには，児童生徒がどんなことができるか，把握しながら取り進めていく必要があります。

活動がスムースになるもの

目的

○できる力を高めるために！

児童生徒の弱い部分を補い，自分の力を発揮できる物である必要があります。そのためには，次に示すような二つのために使用することが考えられます。

① 分からないことやできないことを解消するために使用。
② できることを増やし，できないことを補うために使用。

○自分でできるために！

児童生徒が，自分で課題を実行していくことで，活動の幅を広げることを目的としています。このように自分で活動ができることで自信をもち，より質の高い生活を目指すことができるために使用されることが大切です。

使用に当たって

○自分で使っていますか？

児童生徒が自ら，その必要性を感じることが大切です。そこで，使い方が簡単で児童生徒自身が使やすいものであることが大切です。また，教師が準備しやすく，使用の仕方を教えやすいことも大切です。

○自分の力を発揮できるものですか？

教材・教具，補助具は，「みんなが使っているから」と全員が同じ物を使ったり，「もう，○年生だからいらない」とまだ必要な児童生徒まで使用をやめてしまったりするものではありません。活動を充実していくために，一人一人に必要なものを使うことが望まれます。

気を付けたいのは，それを使用しないことで，もっと自分の力を発揮できる可能性もあることです。様々な状況を考え，見極めていくことが大切です。

豊かな経験や質の高い生活

ひとこと

自分で作業を進めるために，作業の手順を示しためくり式のスケジュールカードを使用することにしました。一つの工程を終了する毎に，自分でカードをめくることで手順が分かり，次の作業に移ることができます。しかし，時として教師がめくって具体的に，声をかけます。これでは，めくり式のカードを使用しなくても，教師の声がけが次の作業への合図になってしまうことに留意しなければなりません。

質の高い生活を目指していますか？

社会参加は，本人の価値観（意識）とその人を取り巻く社会の環境や支援により充実したものになっていきます。そこで，質の高い自立した生活を目指していくためには，「児童生徒一人一人のもてる力を高めること」と「本人に本当に必要な支援を整えること」をバランスよく充実させていくことが大切です。

取り巻く環境を整える

できるための手立てを講じることで，自立した生活につながります。的確な手立ては見つけにくいのですが，場，手順の設定，教材教具，励ましなど，できるための検討していくことが大切です。

必要な支援を整える

本人の価値観（意識）の充実

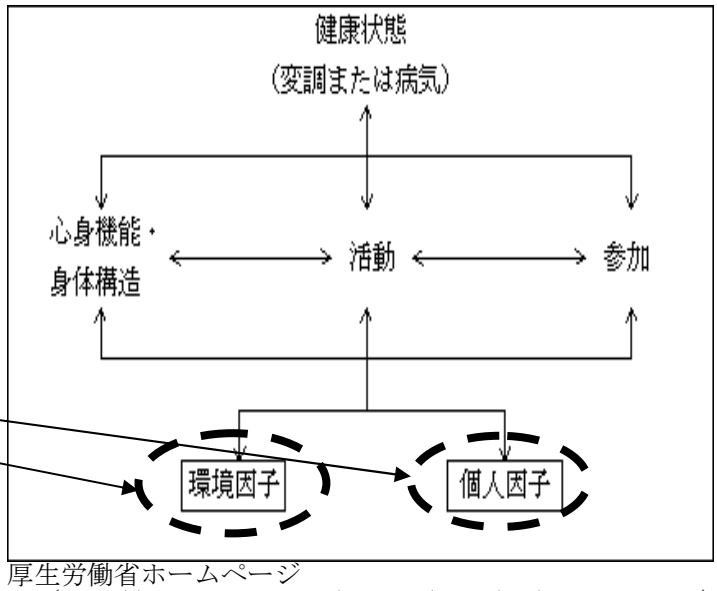
生活に必要な様々なことが自分でできるようになることで，生活が充実していきます。そのことを，自分でも感じることで，よりいっそう「自分のことは自分で」という気持ちを育んでいきます。

もてる力を高める

自立した生活

ひとこと

障がいに関する国際的な分類である ICIDH は，身体障害による社会機能の障がいを分類するという考え方が中心でした。この ICIDH にかわり，2005 年より ICF が WHO において採択されました。この ICF では，生活機能である心身機能・身体機能，活動，参加を考えるとき，環境因子，個人因子の両方から阻害しているもの，解決を要するものをみています。つまり，生活を充実させるためには，その両方から改善を図ることが必要だということが分かります。



厚生労働省ホームページ
（http//www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html）

自分の取り組んだことが具体的に分かる評価ですか？

評価には，様々な方法がありますが，児童生徒に分かる形で評価することが必要です。そうすることで，自分の活動の振り返りとなります。また，具体的に評価することにより，教師が，次の目標を立てるための具体的な手がかりとなります。

評価の工夫

がんばったことが分かる評価

見える場所に完成した作品を飾ることで，多くの人に声をかけてもうことができます。

がんばって作った作品が飾られてうれしい！

やり遂げた成果が分かります

活動が終わったらシールをもらいます。

気をつけることが分かり，それを参考に評価できます。

気を付けるところに印を付けます。うまくいったらほめます。

活動の振り返りと次の目標設定

児童生徒に分かる評価をチェック

- □ 評価にカードなどを使用することで，評価のための活動が複雑にならないように工夫していますか？
- □ 評価に使っているカードやシートは，活動の手がかりとなるものですか？
- □ 児童生徒は，自分の活動した成果を自分で伝える手段はありますか？
- □ 児童生徒が，次の目標をイメージすることができるよう評価の結果を示していますか？

実践の様子

ピザ作り

～みんなで～
役割分担し，トッピングを一人ずつの皿に分けました

～自分で～
トッピングを自分の思うままにならべて，オリジナルのピザに！

Ⅴ　仲間や教師とともに取り組む姿

共　同　性

望ましい社会生活にむけた集団での学習を通して，一人一人に合った役割が得られるよう工夫することで，児童生徒が集団の一員としての意識をもてるよう，「共同性」という視点をもち指導に当たる。

集団の一員として取り組んでいますか？

仲間と一緒に活動する中で，「仲間と一緒にいて楽しい」，「自分も仲間の一員である」，「仲間のために役に立ちたい」などという気持ちを育てていくことが，人とかかわりながら地域の中で生活することや将来の職業生活につながります。

そのためには，学校生活にみんなで取り組めるテーマがあり，一人一人の活動が充実していること，みんなでやり遂げたことを感じられることが何よりも大切です。

集団での活動

共に活動し，やり遂げる取組

見通し

集団の中で安心して活動に取り組めたとき，集団の中での居心地の良さを感じることができます。

そこで，集団としての活動の見通しがもてるとともに自分の活動の見通しをもつことができるようにすることが大切です。

仲間と一緒にいて楽しい

共有できるテーマ

みんなで何かをやり遂げたとき，仲間であることを感じることができます。

そこで，一人一人が自分の力を発揮しながら，仲間とともに取り組める活動内容のテーマを設定することが大切です。

自分も仲間なんだ

役割分担

自分が責任をもち役割を果たした活動が成功したとき，役立った喜びを感じることができます。そして，仲間のために役に立ちたいという気持ちが育っていきます。

そこで，児童生徒一人一人に必要とされる役割が提供されることが大切です。

仲間のために役立ちたい

集団の一員としての意識

ひとこと

集団を嫌がる児童生徒がよく見られますが，理由は，必ずあります。

例えば，こだわりや苦手な感覚があるのかもしれません。一緒に活動する意味が分からないのかもしれません。

集団での活動をあきらめることなく，集団に加われない原因を見つけ，手立てを講じることが大切です。

集団の取組が楽しくなるチェック

- □ 児童生徒に合った様々な活動を取り入れられる内容ですか？
- □ 仲間とやりとりできる取組ですか？
- □ 共有できる課題は，児童生徒が興味関心を示すものですか？

児童生徒一人一人を尊重した取組ですか？

家庭や学校を出た地域社会の中では，生活年齢相応の態度が求められることが多くあります。学校生活では，集団の中で年齢に合った活動や役割を果たしながら，年齢相応の意識を育てていくことが可能です。

そこで，一人一人の発達段階にばかり目を向けてしまうことなく，個人としての尊厳を保ち、教師や仲間との関わりを年齢相応にしていくことを意識して取り組むことが大切です。

集団の中で年齢や年代に合った関わりをするために

単元名
年齢にふさわしい，単元名にすることで，児童生徒も教師も年齢を意識して，取り組むことができます。

教材・教具
その年齢の児童生徒にふさわしい教材・教具を準備していくことで，年齢相応のことへも興味・関心を広げることにつながります。

声がけ
年齢相応の言葉で話すことで，お互いに年齢を自覚することができます。言葉や話しかける口調に気をつけます。また，呼び捨てにすることはやめるべきです。

一人一人の尊重

グループ名
日頃から，児童生徒が，年齢や年代に合ったことに目を向けることができるように配慮していくことが大切です。子どもっぽくならないように注意します。

活動内容
中・高校生に遊びの指導は，不要です。その年齢ではどんな活動内容がふさわしいか吟味することが大切です。

関わり方
一緒に歩く場合でも高校生には，高校生としての関わり方が必要です。手をつないで買い物にいくということは不自然です。生活年齢に合った関わりになるように支援に注意します。

年齢相応の意識をもてる取組

ひとこと

修学旅行の報告会でのこと。Ａさんはお話ができませんでしたが，写真を貼った画用紙で自分の楽しかったことを発表しました。その後に見たＶＴＲにも立派な態度で見学する様子や食事を楽しく食べる様子が紹介されました。

お話もでき，普段の課題もＡさんよりもずっと難しいことを勉強しているＢさんから，「Ａさん，すごかった。僕もＡさんみたいに修学旅行に行きたい」という声が聞こえました。年齢相応の立派な態度で学習している先輩としてＡさんは，Ｂさんの良い手本になっていました。

教師の役割を確認できていますか？

児童生徒一人一人のもっている力は，それぞれ異なります，全員が十分に学習に参加できるよう教師が支援をしながら，人との関わりを広げていくことが大切です。そうすることで共通の課題意識をもって活動することにつながります。そこで，教師は，児童生徒一人一人の実態や活動内容に合早生手支援のための役割を行うことが大切です。

児童生徒が共通の課題意識をもつための教師の役割

手本を示す

「一生懸命」，「がんばる」，「楽しく」などの気持ちを育てることが大切です。そこで，教師がこのような気持ちで取り組む姿勢を示しながら共に活動することで，児童生徒の手本となることが大切です。その姿を見て，取り組む際の態度を学んだり，やり方を真似したりすることができます。

教える

課題に挑戦することは必要なことです。しかし，失敗ばかりしていてはやる気がなくなってしまいます。そんなときには，やり方をきちんと教えるという教師の役割があります。やってあげるのではなく，うまくできるように導いていくことが必要です。

活動を促す

児童生徒が，集団の中で役割を果たして活動に取り組むためには，「誰かにしてもらう」のではなく，「自分でする」ことが大切です。そこで，教師は，どこにあるか分かるように提示したり，どうしたらできるか示したりすることで，自分でできるための手がかりを示し，促していくことが大切です。

教師の効果的な支援による集団活動

ひとこと

児童生徒が，実際の生活の場面に学んだことを生かしていくためには，必要な場面で必要な支援をすることが大切です。そこで，教師は，児童生徒の様子がよく見えるように距離を置くことで，さりげない支援について考えることができます。また，児童生徒が自分でできるまで待ったり，できない部分の手伝いを求めるような自発的な行動を待ったりすることも必要です。

児童生徒へのさりげない支援チェック

- □ 活動の見通しをもたせていますか？
- □ 活動の手がかりを示していますか？
- □ 教師が示した手がかりに，児童生徒は気付いていますか？

児童生徒一人一人が活躍できる役割ですか？

自分の活動が，全体の活動に必要であることが分かると，児童生徒は，自分の活動にやる気をもって取り組むことができます。また，お互いに励まし合い，認め合うこともできます。そこで，どの児童生徒もみんなのために活躍できる活動をし，全員が欠かすことができないメンバーであることを感じることができるような役割分担にすることが大切です。

できること

児童生徒一人一人について，「**できる**」活動で役割を考えることが大切です。

一生懸命になれる活動

発達の状態の把握と興味・関心に合った活動を考えることで，一人一が一生懸命になれる活動を設定することが可能になります。このような観点から一人一人の役割を単元活動にアレンジしていくことが大切です。

仲間に認められる活動により

難しい仕事でも簡単な仕事でも，その重要性は同じです。どの児童生徒も自分の役割を果たすことで，仲間に認められることが可能になります。

責任のある活動

良さ

できることが実際の取組に生かされた時，存在が認められていきます。そのできる力がその児童生徒の「**良さ**」となっていくでしょう。

一人一人が活躍できる
児童生徒の役割分担

ひとこと

木工作業は，安全に配慮が必要であったり，作業も細く作業内容が多かったりすることが少なくありません。そんな木工班に所属しているＡ君は，歩行や日常生活に介助が必要な生徒です。

彼は，ゴミ捨てを仕事としていました。一日に木工室とゴミ捨て場を何度も往復し，作業で出たゴミを運んでいました。A 君は，ゴミ捨ての仕事を一生懸命やっていましたし，木工班の児童生徒も A 君の仕事を認めていました。このような役割分担は，よく見られます。しかし，A 君の役割は、見直すことが必要です。A 君が作業班の中で製品を作る活動に関わる役割をもつことで，仲間と製品を作るというテーマを共有することを可能にします。そこで，以下のような改善策が考えられます。

（例１）木工の作業の中で補助具を使用等により手厚い支援をしながら，A 君が作業工程の一つを担当すること

（例２）別の作業班に変更し，A 君が責任をもって取り組める役割を担当すること

児童生徒の良さを発揮できるグループ分けですか？

仲間と共に取り組み，やり遂げた満足感・成就感につなげるためには，グループの編成が大切です。例えば，以下のような観点でグループ編成をしていくことで，一人一人の良さを発揮できるようにします。

グループ編成の視点

同じ目標を達成するためのグループ

実態が多様な児童生徒が，一人一人の実態にあった学習を行うためには，時には同じくらいの力をもったグループ編成にすることで，共通した課題に取り組むことが考えられます。

例　ボウリングに行くための取組

Ａグループ：
ゲームを楽しむことを中心に取り組む

Ｂグループ：
申し込みや，靴の借り方等，自分で遊びに来るために知っておきたい内容についても取り組む

競い合うためのグループ

共に活動する中で，時には競い合うことも必要です。

チームで競う中で「リーダーとしてまとめる」，「チームのために練習する」という姿勢が生まれることもあります。

「〇〇さんに負けないようにたくさんの製品を作る」と集中して取り組んだり，「〇〇さんに負けないように上手になりたい」と練習に力が入ったりというような積極的な様子が見られたりすることもあります。

助け合い分かち合うためのグループ

一人一人が自分の責任を果たす中で，行事の成功のために全員で取り組みながら，仲間と協力していくことができます。グループの中には様々な実態の児童生徒がいます。その中で児童生徒一人一人が力を合わせ，やり遂げることができると，仲間意識がより高まります。

このような取組を通して，「みんなのためにがんばりたい！」という気持ちが育っていきます。

仲間との課題の共有

ひとこと

領域・教科を合わせた指導は，集団の中での活動を通して，一人一人のニーズに答える取組ができるという特性があります。そのため，集団の中の全員が活躍するためには，一人一人に学習活動をアレンジして設定することが大切です。お互いのできることを生かしていくことで，それが可能になっていきます。

グループ分けをチェック

- □ 一人一人の良さを発揮できるグループ分けですか？
- □ グループに分かれたことにより，活動の流れが滞ることはありませんか？
- □ グループ全員が，それぞれに活躍できるグループですか？

特別支援学校における
領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究

～領域・教科を合わせた指導の実態調査に基づく授業づくりの資料作成を通して

「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料」理解編

岩手県立総合教育センター
特　別　支　援　教　育　担　当